

## 空間のリサイクル

長 坂 大

持続可能な社会にむけて、建物のリフォームやリノベーションの事例が増えている。既存条件を生かした建築活動は単なるゴミの削減にとどまらず、実は豊かな空間創造にもつながる指向性を持っている。日本が高度経済成長時代に失い続けてきた「歴史」の蓄積が、建物や場所の豊かさに強く関係しているからだ。また、意外に誤解しやすいのは、建築や都市はモノでつくられているが実際に人が利用するのはその間の空間であること。リサイクルを論ずるにはそのことをよく認識すべきである。拙作を題材にしながらそのあたりの考え方を紹介したい。

キーワード：建築，都市，リフォーム，リノベーション，リサイクル

### 1. 性能を上げればいいとは限らない。

建物のリフォームやリノベーションはリサイクル活動の一つである。リノベーションは、たとえば住宅をレストランにするといったように、当初と異なる機能や意味のある建物に改造することである。対象を、より材料に近いものとして認識し再活用するという意味ではこちらの方がリサイクルにふさわしいかもしれない。

これをさらに展開して、対象を建築物単体にとどまらず、建物と建物の間、つまり庭や隣家との隙間、さらには公共空間へ展開して道路や広場と言ったものまで拡張して考えることもできる。

たとえば道路のリフォーム。海岸沿いの曲がった道を思い浮かべてほしい。その曲がりを緩やかになるよう微修正する計画と、海を埋め立てて直線にする計画を比較する。前者は、もとの地形を継承しているから物理的な工事量は少なくすみ、スピードは相変わらずやや出しにくいかもしれないが、風景にはなじんだ道として存続するだろう。後者はその逆である。もし廃道にして、道路であったところを海沿いの公園にするならリノベーションということになる。単に現在の機能が向上すればよいとするのではなく、対象を素材としての既存環境としてとらえて広い観点で見直せば、建築や都市空間を大きく改変しないで日常生活を豊かにする可能性がある、というのが本稿の視点である。

千利休が拾った小枝を茶室の床（トコ）に置き、インテリアを美しく演出したように、「目利き」であれば、多くの人がゴミだと思っているもののなかから美しい

もの、役に立つものを見出すことができる。土木や建築の設計活動ではこうした「目利き」の能力が求められる時代だと思う。

### 2. サントリーニ島のリノベーション

「街」のリノベーションをひとつ紹介したい。観光ガイドブックにもよく登場するギリシャのサントリーニ島の街イア（Oia）は元漁村で、現在は街の大半が外部資本によるホテルや別荘、商業施設に変わっている。かつての住居とそれらをつなぐ街路空間一式が宿泊室やエントランスロビー、ダイニングルームになり、ひとつのホテルとして再統合され、それがこの地域のひとつの様式となっている（写真-1）。

この方法は伝統的な街を完全に保存しているわけではない。大きな駐車場や高層ホテルをつくって、既存の風景を大きく破壊することを避けている。つまり再利用の観点から、機能性と全体イメージとのバランスに細心の注意をはらっているのである。

この例は視覚的に再利用の目標が分かりやすいが、通常我々が携わるプロジェクトではそれが見えにくい。だからこそ、それを見出す能力を専門家が鍛える必要があるのではないかと。

### 3. 敷地の余白形状を再利用する

「おざわ歯科」<sup>1</sup>

これは私が携わった神奈川県平塚市の既存歯科医院の増改築計画である。余白と思われていた敷地形状をヒントにして個性的な建築とした例である（図—1）。

敷地中央にある院長の母の家を取り囲むように新しい部屋を増築し、各室から建物の隙間を利用した中庭が眺められるように設計した（図—2，上）。

敷地はヘタ地（余りのような土地）であるがゆえに、当初院長はこの余白の土地では良好な建物ができるとは考えていなかった。しかし、設計者はそうした変形敷地の条件が魅力的な空間のきっかけとなったと考えている。

敷地周辺はかつての田園地帯で、今は雑然とした郊外住宅地である。計画当初は、歯科業界が過当競争時代であることに加えて敷地の余地が少ないことから、利便性の高い駅前に移動する意見もあった。しかし、不定形な用地の特徴がかえって可能性となることがわかって計画は一気に鮮明になった。

27mのロビーは、長くなりがちな廊下をいっそ長いがゆえに魅力的な空間として扱おうとした結果である（図—2，中）。敷地内の高低差はロビー内のステップとし、魅力的なインテリアとしてだけでなく、それ

を利用した小研修スペースとしても機能している。閉鎖的な空間は、北側トップライトの静かな光によって、時間の変化が穏やかに感じられる落ち着いたロビーとなった（写真—2～4）。

そもそも建築や都市は物理的機能以外の評価も重要であるという認識が必要である。その表象について、現在の日本の一般認識は低すぎる。文化社会における衣服が単に保温性や着脱機能を有していればよいというわけにはいかないように、建築や都市もシェルターや流通機能、安全性の実現だけでは国民を満足させられなくなっているのである。

この歯科医院は高度な医療技術を自負しているが、建築はそのことを表象するのではなく、むしろその医療活動を支える穏やかで心休まる空間をつくらうとした。ホスピタルの語源のとおり、病院は物理的治療機能が優れているだけでなくゆったりとてなされて心身ともに癒される場であってほしい。

そうした構想のもとでは、「大きくて立派な病院」をつくるのではなく、敷地の余白をつなぎ合わせてつくる空間規模は好都合でもあった。余白をリサイクルするという形態（配置計画）的制約はチャンスになったのである。

1：「おざわ歯科」 日本建築学会作品選集 2011, p.34, 35 / 新建築 2009年4月号, p.154～159 他



図—1 おざわ歯科



写真-1 サントリーニ島 Oia



図-2 コンセプト図



写真-2 スキマを利用した中庭(ロビーの突き当たり)

写真/上田宏 (写真-2 を除く)



写真-3 ロビー南側を見る。スリット状のトップライトから光が落ちる。



写真-4 南側から見る。



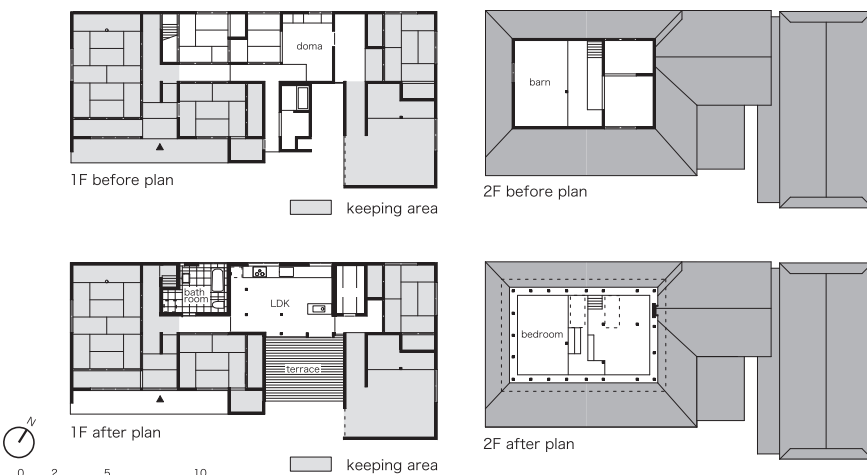
写真一五 南西側遠景。外観はほとんど変化していないように見える。敷地は防風林に囲まれた尾根部分に位置している。手前の蛇行した道からアプローチする。



写真一六 西側から見る。



写真一七 小屋組み現しの2階寝室



図一三 淡路島の家



写真一八 既存DK (doma)。正面開口を右に移動する。



写真一九 DK。左壁沿いにキッチン、正面に薪ストーブが新設された。

#### 4. 「ありふれた建物」の再生

##### 「淡路島の家」<sup>2</sup>

次の例(図-3)は、日本各地に見られるような一般的民家の改造例である。

陶芸作家夫妻が、工房付きの住宅として夫人の祖母が住む農家を一部リフォームする計画である。2階の薄暗い物置き部屋の四周をすべて細長いガラス窓にし、ガラスの下には通風用の板戸を設け、さらに断熱材の充填や筋交いによる構造的補強を行って、安全で快適な居住空間へと変化させている。

このアイデアのきっかけは、尾根状地形の先端部分という立地条件である。建物は周囲を防風林に囲まれていてその緑の囲いを楽しめるだけでなく、その木々の隙間から周囲を展望することもできる(写真-5,6)。つまり、当初薄暗い物置き部屋であったこの場所は、小さな天守閣のような場所でもあった。設計者としてその「位置」の可能性を生かすことができると考えたのである。当面は寝室として利用されるが、将来は夫妻の作品を展示するギャラリーなどへの転用も視野に入れている(写真-7)。

1階では、過去に増築された水廻りを撤去してウッドデッキにし、その水廻りによって失われていたダイニングキッチン採光・通風・眺望を取り戻している(写真-8,9)。

ありふれた建物は、しかしだからこそ風景の中で穏やかに存在している。そこに少ない操作を加えただけで、全く新しい室内空間ができたところにこの建築の意味がある。

2: 新建築住宅特集 2009年10月号, pp.120~127

#### 5. 使いにくい建物はゴミか?

都市や建築を壊して建て替える理由は、性能的な限界もさることながら、利用者や設計者の思考の柔軟性や想像力の欠如が原因になっていることが少なくない。当初の機能を失ったからといって、構築物や空間一般がただちに無用になるとは限らない。プランが時代にそぐわなくなっても、小さな改造で新しい機能に適応できたり、建築の形質が別の機能を獲得できる可

能性がある。都市や建築において、対象を当初の機能を満たす装置としてのみとらえるのではなく、あるきっかけで生まれたひとつの地形的資質としてとらえた方が、新しい可能性を創造しやすいのである。

逆に言えば、地形的資質となるような対象を設計する場合、求められた機能を実現するだけでなく、地形的資質の高さにも心を配るべきである。

#### 6. 空間のリサイクル

ありふれた場所や建物が適切にリサイクルされていけば、エネルギーの節約になるだけでなく場所の文化的資質を高めることになる。物資を投入して「立派なもの」をつくるだけではなく、利休の床の間のように、そこにあるものから美しい空間を創造する知恵や感性が鍛えられるべきではないかと思う。そのことで、建物だけでなく都市や自然の空間全体が魅力的にリサイクルされる可能性が高まるだろう。隙間や配置、地形を継承することの価値を検討してほしい。

#### 7. 造形遺産

現在、私の研究室では毎年「造形遺産」という課題に取り組んでいる。ダムや橋脚、高架道路、埋め立て地といった、工事途中で放棄された土木工作物や人工地形を発見し、それらを完成させるのでも廃棄するのでもない第3の道を提案せよというものだ。それらが人間のための場所や施設として再生されることで、不要な粗大ゴミ化を抑止するとともに、造形的な遺産であったと思えるようにしよう、というシナリオである。

我々の行うすべての建設造形活動は、地球の表面のメンテナンスにすぎない、と考えている。

JICMA

##### 【筆者紹介】

長坂 大 (ながさか だい)  
建築家  
京都工芸繊維大学 教授  
建築設計事務所 Mega 主催

